

「輝くほどに影は色濃く」

4 年程まえに、名古屋中央教会で伝道師をされていた先生がいます。今は、確か海外留学に行かれていますかと思えます。この先生とは、私がここ中部教区に来る前から少々繋がりがありまして、私の妻も含め仲良くさせてもらっていました。この先生は、5 人兄弟の長男さんでありまして、文字通り 5 人兄弟で、男の子 5 人の一番上のお兄ちゃんでした。今のご時世、5 人兄弟は多分、子沢山の部類に入ると思えます。子育てに係る経済的負担も大きいでしょう。まして、名古屋中央教会はメソジストの教会で、その牧師養成校は、関西学院大学です。文系の神学部と言えど、学費は安くはありません。その先生も自分でバイトしながら学生生活を過ごされていましたが、彼が言うのは、「うちの家計は常に火の車だったっていうか、常に灰しか残らない」のだそうで、学費云々も大きな支出ですが、そもそも家計に占める食費の割合が半端なかったとのこと。この男子 5 人を抱える家族の話で一番面白かったのが、5 人目の男子が生まれてしばらくして、お父さんが「なあ、メスの犬が飼いたい」とつぶやいた、ということでした。せめて、ワンちゃんでも良いから女の子が欲しい、と。5 人の男の子に向けられる愛情には何の不足もないでしょうけれど、それでも漏れ聞こえてきた「メスの犬が欲しい」という願い。そのお父さんの切実さが、ちょっとだけ笑いを誘いました。

今日の聖書箇所は、創世記に登場するイスラエルと呼ばれるヤコブ、このヤコブの妻であるラケルのことが書かれています。ただ、ここにおけるラケルの位置づけと言うのは、イスラエルと呼ばれるヤコブの妻であるとか、ヤコブとの間に生まれた子どもたちの母であるとか言うような、そう

いう個人的なものではなくて、イスラエルという民族、イスラエルという国家を支える妻であるという認識が妥当だろうと言えます。つまり、ここでのラケルは単なる息子の母ではなくて、イスラエルという共同体全体の母としての性格を持っているということです。なので、「ラケルが息子たちの故に泣いている」という表現の意味するところは、イスラエル全体の子どもたち、そこには老若男女含まれ得るわけですが、そうした民族規模の大多数の子どもたちが争いや侵略の歴史の中で失われたというイスラエル共同体全体における深い悲しみを表しています。こういう風な聖書理解は、エレミヤ書が書かれた当時よりも、ディアスポラというイスラエル民族の離散を経験し、さらにホロコーストという大量虐殺を経た現代から捉えた直した方が、より実感が得られるかも知れません。「ラマで声が聞こえる、苦悩に満ちて嘆き、泣く声が。ラケルが息子たちのゆえに泣いている。彼女は慰めを拒む、息子たちはもういないのだから」。神殿の崩壊、国民の強制移住、帝国による侵略、国家の解体と国民の離散、ナチスによる民族浄化という名の大虐殺など。数多くの悲惨な出来事があったイスラエルの歴史が紡がれる中で、どれだけの息子たちが、イスラエルの子どもたちが失われていったか、と想像します。民族の母としてのラケルに感情と声とが与えられるのだとすれば、その悲しみは私たちの想像を超え、そして、深い絶望の内に安易な慰めの言葉を拒絶するということもあり得るでしょう。いくら慰めの言葉を掛けたところで、すでに命を喪ってしまった子どもたちが帰って来るわけではない。子を喪う母の悲しみは、民族というより大きな括りの中で、数えきれない程の子どもの死を経験したとする母ラケルの、想像を絶する悲しみへと語り直されるのです。

多くの民を喪うという、民族の母としてのラケルの悲しみは、別の方面から見れば、国の将来を担うはずの世代がいなくなってしまったことへの悲しみであるとも言えます。第2次大戦中、日本

でも多くの若い命が戦場に散っていきました。民族や国という共同体にとって、構成員を喪うということは、将来を担うべき希望の命を喪うということです。今日の聖書箇所(ルカ 17)には、「あなたの未来には希望がある」という、希望への言葉が書かれています。これは、つまり息子や子どもという若い命を喪い、悲しみに暮れる民族の母であるラケルは、若い命が喪われたと同時に、将来における希望の光をも失ったのだ、という前提があるわけです。そういう絶望的な状況があるからこそ、「あなたの未来には希望がある」という聖句が、ここに記されているのです。

今日の聖書箇所を、希望の喪失と、その回復という風に捉えるなら、より深みのある読み方ができるだろうと思います。「苦悩に満ちて嘆き、泣く声」を響かせるラケルに対して、主なる神様が語り掛けたのは、「あなたの苦しみは報いられる。息子たちは自分の国に帰って来る。あなたの未来には希望がある」という言葉だった。「苦しみは報いられる。未来には希望がある」という励ましの言葉は、おそらくこの現代日本を生きる多くの人達が、聴きたい、言ってもらいたい、約束してもらいたい言葉なんだろうなと私は思います。

私が以前いた東中国教区の教区事務所の人の話ですが、この方が言うには「バブルの頃は景気が良くて、今思えばええ時代だった」と。私もバブリーだった頃の日本に少々憧れもあったので、興味深く聞いていると、彼はとても良い事を言ってくれました。「昔は金がなくても、将来が明るかったから、楽しかった」と。多分、今の日本の一番深刻な問題は、「将来が明るくない」ということだと思います。もちろん税金が高いとか、所得が上がらないとか、そういう経済的な不満も社会に影を落とす要因のひとつではありますが、それでも努力すれば何となる、という出口さえ開いていけば、心まで病むことはないと思います。けれど、その出口が見えてこないことが、非常につらくて、しんどいんですね。

山田昌弘さんという社会学の先生がいらっしゃいます。彼の有名な著作に『希望格差社会』という本があります。この先生は、「パラサイト・シングル」とか、「婚活」とかいう造語を作って広めた人なのですが、『希望格差社会』というネーミングもなかなかのセンスだと思います。この本は緻密な統計データを基に書かれたものなので、結構、読むのはしんどいのですが、この本の簡単な解説文にはこう書かれています。「職業・家庭・教育、そのすべてが不安定化しているリスク社会日本。『勝ち組』と『負け組』の格差が、いやおうなく拡大するなかで、『努力は報われない』と感じた人々から『希望』が消滅していく。将来に希望がもてる人と、将来に絶望している人の分裂、これが『希望格差社会』である」。先の教区事務所の人の言葉にも重なります。お金が少なくても貧しくても、将来に希望があれば、人は逞しく生きていくのだらうと私も思います。だから、経済問題も確かに深刻ではありますが、それでも人の健全な精神まで侵すことはありません。最も残酷なのは、人の生きようとする願望や、頑張ろうとする熱意や、幸せになろうとする欲求さえ減退させてしまう『絶望』が広がっていくこと。さらに加えるなら、ある一方では『絶望』が支配的なのに対して、ある一方では『希望』が輝いているという、その格差の現実があることが、とても悲惨であると言えます。ある一方が輝けば、ある一方の影は濃くなるのは、物理学における光の原理であると同時に、この社会における希望と絶望の摂理でもあります。

『希望格差社会』という、この本は、どちらかと言えば研究論文に近いものなので、示されている結論も極めて社会的なものなのです。そこに信仰という神学的な考え方の入り込む余地はありません。しかし、この本に書かれている『希望の格差こそ最も深刻な社会問題』という問題提起に対して、では、キリスト教信仰を持つ私たちは、どう解答していくのか、ということは考えていく必要があるかと思います。かく言う私も、明確な実効性のある回答を用意できていない

のですが、とても大きな宿題を背負っているなあという実感はあります。

膨大な量の夏休みの宿題も、まずは取り掛からないと終わりは見えません。「希望の格差」という大問題を前にして、私たちは、今日の聖書箇所を書いてある「あなたの未来には希望がある、と主は言われる」という、この御言葉をまず確信するところから始めて参りましょう。そして、その確信のある人生の歩みを通して、背中で語っていくということは、ひとまず実行可能なのかなと思います。すぐに結果が出ることはありません。でも、言葉と背中でちゃんと宣べ伝えて行きましょう。聖書の語る、その「希望」に、あなたも、誰でも与ることができるんですよ、と。最初、それは霞を食べて元気を生み出すような荒唐無稽な話に思えるかも知れないけれど、神様を信じること、神様が約束してくださる希望を信じることには、ちゃんと重みがあって、実感があって、心を元気づける熱量があるんですよ、と言葉と背中で伝えてゆきたいと思います。

ただし、気を付けないといけないのは、『希望格差』という点において、私たちはその格差における「勝ち組」に属するわけですから、お金持ちがお金持ちであることに胡座をかいて驕り高ぶると、当然不評を買うように、私たちも晴れ晴れとした希望いっぱいの姿を見せつけているだけでは、もしかしたら希望を必要としている方々には届かないのかも知れません。さっきも言ったように、一方が明るければ、もう一方の影は濃くなります。絶望に浸っている人に謙虚に寄り添い、眩しくない程度の希望の光を届けること。これも、主にある希望に生きる私たちが、実践すべき隣人愛であると言えます。イスラエルの母としてのラケルの苦悩を、神様は未来への希望という形で慰められました。希望の宣言という慰めの言葉は、今を生きる私たちにも響いてくるものです。「あなたの未来には希望がある」。この素晴らしい福音を、自分自身で味わい、また他者に対しても語っていくという信仰を続けたいと願います。お祈りを致します。

神様。

あなたに導かれる人生の日々は、とても幸せ一色であるとは言えません。悩みも多く、痛みもあり、苦しいことも経験しなければなりません。また、私や私の周りの人が幸せを味わうとしても、その範囲の外には不幸と絶望の広がる風景が見えてしまいます。しかし、あなたは十字架で死んだイエス様を捨ておかれず、復活させ、天へと導かれた方であります。どうか、私たちの人生においても、私たちの生きるこの社会においても、苦しみからの復活と、幸せな日々を手に入れられるという希望をお与えください。この世界で絶望しているすべての人たちへ「あなたの未来には希望がある」という御言葉が届きますように。そして、その御言葉を届けるために、私たちも相応しい行いを選び取ることができますように。あなたが導き、十分に用いてください。この祈りを主の御名によって、お捧げ致します。

8月召天者を憶える祈り

聖書朗読 ヨハネの黙示録7章13～17節

すると、長老の一人がわたしに問いかけた。「この白い衣を着た者たちは、だれか。また、どこから来たのか。」そこで、わたしが、「わたしの主よ、それはあなたの方がご存じです」と答えると、長老はまた、わたしに言った。「彼らは大きな苦難を通して来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである。それゆえ、彼らは神の玉座の前において、昼も夜もその神殿で神に仕える。玉座に座っておられる方が、この者たちの上に幕屋を張る。彼らは、もはや飢えることも渴くこともなく、太陽も、どのような暑さも、彼らを襲うことはない。玉座の中央におられる小羊が彼らの牧者となり、命の水の泉へ導き、神が彼らの目から涙をことごとくぬぐわれるからである。」

山口サキ姉	やまぐち さき し	(1974年8月1日)
笹本純一郎兄	ささもと じゅんいちろう けい	(1937年8月11日)
山口寅雄兄	やまぐち とらお けい	(1975年8月13日)
柴田キヌ姉	しばた きぬ し	(1951年8月21日)
寺島達夫兄	てらしま たつお けい	(2003年8月23日)
松木ひで姉	まつき ひで し	(2002年8月29日)

8月召天者を憶える祈り

神様。私たちは今、来る8月に天へと帰って行かれた方々を憶えて祈りを合わせています。私たちの心の内には、天上で和やかに過ごされているであろう親しい方のお顔が浮かびます。今生の別れを経験して尚、あなたの下における親しい方々との再会の約束があることを感謝致します。天にあって、地にあって、あなたは私たちをひとつにしてください。8月はここ日本にあって、この世界の平和を、特に心に留めるべきひと月でもあります。先に召された方々から、この世での務めを受け継いだ私たちは、世界の平和を実現するという尊い業をも継承致しました。たとえ、その実現が困難だとしても、平和の使者としての歩みを全うすることができるように、私たちの日々の信仰を支え導いてください。

天の上には永久の平安がありますように。そして、地の上には豊かな慰めと、平和へと至る道筋をお与えください。この祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。